

研究ノート

家族システムに関する一つの考察Ⅲ

杉 本 大 輔

要約

本稿では、筆者がこれまで考察してきた家族システム論についての考察のうち、家族機能についての考察を、家族社会学、家族福祉論において展開された諸理論を紹介したうえで、家族システムと家族構造という、筆者が展開してきた家族システム論の俎上に載せて展開するものである。

1, 家族機能研究の展開（森岡清美，大橋薫，野々山久也）

家族研究の歴史は家族機能研究の歴史といっても過言ではない。社会の変化とともに、家族の形態、構造、機能が変化し、家族のそれらの変化が社会にフィードバックされ、さらに社会が変化する、このような単純なミクロ・マクロの相互交換的図式が成立するかは検討の余地があるが、家族—社会双方の変化の諸相が、ある点は影響されず、ある点は影響を受け、何らかの変化を促してきたことは、これまでの研究で明らかになっている。ゆえに、家族と家族外社会との関係は、何らかの形で双方にフィードバックが存在することを前提に考える必要があると考える。家族機能理論において、最初にそのような視点にたって、研究をつづけた、オグバーン、バージェス、マッキーバー、パーソンズ、などの諸理論は、後に「家族機能縮小論」と名付けられた。社会の近代化以前に、家族が保持していたとされる諸機能、オグバーンが提示した、①経済②地位付与③教育④保護⑤宗教⑥娯楽⑦愛情、7つの機能は、①～⑥は家族外制度体—学校、企業、国家など—に吸収され、⑦の愛情機能が相対的に高まった、とした。その後のバージェス、マッキーバー、マードックなども、このオグバーンの理論を受け継ぎ、家族固有の機

能としての、パーソナリティ・愛情の機能をあげている。パーソンズは、家族機能を「子どもの社会化」「成人のパーソナリティの安定化」の2つをあげているが、やはりパーソナリティ機能の重視を唱えている。このような海外の家族機能理論を俯瞰したうえで、森岡は、オグバーンがあげている諸機能は、家族内で遂行されることは少なくなったが、それは消失してはならず、遂行そのものは外部の制度体に委譲されているが、経費負担という形で家族内に維持されている、として、それらを統合する基底機能として、「家族成員のための福祉」を提唱した。さらに、家族から完全に切り離された機能として、「外敵からの防衛」「家内警備」などをあげている。

また、大橋は、集団が持つ機能を、固有機能、基礎機能、副次機能とし、これら3つの機能が持つ対内的機能、対外的機能を、固有機能の対内的機能を性愛機能、生殖・養育機能、対外的機能を性愛統制、種保存（種の再生産）、基礎機能の対内的機能を居住機能、経済機能、対外的機能を生活保障、労働力再生産とし、副次機能の対内的機能を、教育機能、保護機能、休息機能、娯楽機能、宗教機能、地位付与機能、対外的機能を文化伝達、心理的・身体的機能、精神的・文化的機能（この2つの機能を合わせて社会的安定とした）地位付与機能俊とし、これを家族機能と定義した。さら

に、それぞれの機能遂行のためには、家族成員が果たすべき役割遂行、あるいは役割代行、役割代替の重要性を説き、その遂行方法の類型として家族の世帯構成として、①単独世帯（1人暮らし）②夫婦家族世帯（夫婦のみ、夫婦・未婚子）③直径家族世帯（夫婦家族世帯・親）④単独家族世帯（母子、父子、父・母の親同居）⑤準家族世帯（きょうだい、おじおば・おいめい、祖父母・孫）⑥疑似家族世帯（友人同士世帯、同性愛者世帯、施設世帯）とし、この6つの家族世帯構成における機能遂行を検討することの重要性をあげている。

野々山は、前記したオグバーンらの家族機能の諸理論を俯瞰したうえで、1980年代から顕在化してきた「家族形態の多様化」とあわせて「家族機能個人化説」を提唱し、同時に、一定の家族周期へのモータルパターンから逸脱した家族パターンを“病理”とみることを戒め、個々の家族の各々の家族周期の在り方を尊重することを提唱した。さらに、個別の生活周期における家族機能遂行のために、家族の周辺の資源の活用と、それによる家族危機からの回避の重要性を唱え、家族社会学で展開されてきた家族の危機的対応資源を個人的資源、家族的資源、地域的資源、準社会的資源、社会的資源に分類し、それぞれの資源がさらに機能的側面から、身体的側面、物財的側面、情緒的側面、間接的側面に分類されてきていることをあげ、さらに家族システム論への結合と、それを活用した家族援助の方法論構築の重要性をあげている。さらに、野々山は家族システム論の視点から、システムとしての家族について、以下のように述べている。

「まず、第一に家族が開放的な情報処理のシステムであるということや、負のフィードバックによって維持されるホメオスタシス（恒常性維持）という特性が存在するという以上に、正のフィードバックによって構造変革をきたすテオフォジェネシス（形態発生）と言う特性を有しているという考え方である。」

「そして次に重要な示唆は、ホメオスタシスそのものについての新しい考え方である。これまで家

族システムには冷蔵庫やルームエアコンのサーモスタットと同じように、制御装置が内蔵されていて、一定の基準に従って作動し、安定した、一定の均衡状態としてのホメオスタシスを維持するものと考えられてきた。つまり、これまでは家族システムが全て一様のホメオスタシスを維持するものと認識されてきた。」「しかし今日では、家族システムは多様であって様々なライフスタイルが維持されていることによって、ホメオスタシスもまた、個々の家族システムによって多様であるということ、つまり、従来のように均衡あるいは安定といった一定の方向を想定した援助方法では問題状況の本質的な解決にはならないという認識が高まっている、ということである。」

野々山のこの指摘は、家族システムの多様化により、何らかのインシデントが起こった場合、個々の家族の独力によって、以前の正常な状態、あるいは家族の発展的成長に至ることは困難であり、何らかの外部からの支援の必要性を示唆している。これは、森岡の言う「外部の制度体への委譲」と相関関係にある。森岡の家族機能論、遂行そのものを外部の制度体に委譲し、経費負担という形で、その機能を家族内に保持する、あるいは家族内の恒常性を維持する、という視点に立てば、委譲すべき制度体がない、あるいは存在することに気づかず、家族で抱え込んでしまっている場合、その恒常性に変調をきたす。ここから、家族外の諸関係の形成の重視があげられる。また、大橋の理論からは、家族内の役割は必ずしも固定しているのではなく、必要に応じて、交代、代行、代替的を考えねばならないことを示唆している。これに、野々山の理論を当てはめれば、家族形態の多様性の視点を前提に置けば、家族内役割遂行を補完するような（前記した交代、代行、代替を含む）機能の必要性の示唆ともいえる。

以上の諸理論から、家族機能遂行をスムーズに遂行させる要因は、家族内関係の正常な形成であり、そのためには、家族成員が各々の役割を自覚し、それを遂行するか、あるいは遂行が困難な場合は、役割の交代、代行、代替がスムーズに行

われることが必須であるということができる。

2, ジェネリック・ソーシャルワーク理論 における家族システム構築についての 私論

これまでの論稿で、筆者は小室の構造・機能分析、(①社会は変数の塊であり、システムである。②その変数は、お互いにバラバラに動くのではなく、様々な制御条件のもとに動いていると考える。この制御は関数である。③この関数を構造と呼ぶ。④この構造は一定の条件下で変動していく。この条件を機能とする。⑤その機能が十分達成されていない場合に、構造は変動する。)と、ジェネリック・ソーシャルワークにおけるエコロジカルな視点(マイクロ、メゾ、エクソ、マクロ、クロノ)の各システム理論を参考にして、親子を中心とした家族関係を家族構造、家族成員が個々に持つヒューマンネットワークの総体を家族システムと定義した。そして、家族外の人間関係が希薄な家族ほど、変動(家族崩壊を含む)を起こしやすい、と提示した。前記した森岡、大橋、野々山の家族機能諸論を踏まえ、筆者が提示した家族システムにおける家族機能について検討したい。まず、家族構造内において、成員各々が地位(親、兄弟、祖父母等)が明確化され、さらに各々の役割が決定されており、その遂行が滞りなくなされ、家族外の人間関係も良好なとき、変動が起きない状態、すなわち、家族機能の順機能が働いている状態、家族の恒常性が保たれている状態、と考える。しかし、突発的なインシデント等、何らかの理由で、この地位と役割が変化した時、その機能遂行に支障をきたし、家族変動を起こす可能性が増大する。野々山が論じたように、家族形態が多様化、縮小化が進んだ現代社会においては、家族変動発生の確率は高まっていると言える。このような場合に、特定の家族役割、特に近代家族論で提唱された性別役割分業に家族構造内成員が固執した時、その確率は、さらに高まる。仮に、家族内の役割変更が生じた際に、家族構造内の関係だ

けで、それに対処し、個々の成員が、その変更に対応しているのであれば問題は起きないが、そうでない場合は、変更した役割遂行に伴う所々の事柄について、各成員が納得でき、さらに速やかに遂行を促すような仕組みが必要となる。この仕組みとなり、家族構造内の役割変更についての助言等、あるいは具体的な援助を行う機能を果たすものが家族システムであり、さらには、野々山が言うところの資源の活用となる。ここに、マイクロ・メゾ、エクソにおける、家族システムが遂行すべき機能が見出される。すなわち、家族構造外のメゾ的な人間関係による、助言、情報提供、援助を得るための信頼関係の構築と、家族システム外のエクソ的環境内に配置されている社会資源の把握と、その活用方法の理解、である。前者を仮に家族システム構築機能、あるいは人間関係構築機能、後者を地域資源把握機能とする。前者の家族システム構築機能については、これまでに論じてきたように、家族形態が多様化、縮小化している現代においては、家族構造内だけでの関係性に頼ることは脆弱であり、突発的なインシデントに対応できず、家族変動が起こる確率が増加する。ゆえに、家族構造外のヒューマンネットワークの構築と連続したコミュニケーションにより、客観的な助言を得られるようなシステムを常に構築しておく必要がある。後者の社会資源把握機能は、森岡の家族機能論でも論じられてきたが、本来、家族が有していた機能遂行体が外在化し、経費負担という形で、家族の機能が残存しているとすれば、その機能体を把握することにより、あるいは身近にない資源を把握することにより、家族構造成員に対する役割遂行の理解を深めることとなる。クロノ的機能としては、現代社会に適した関係性の構築、あるいは時代時代に合った関係性の把握する機能、仮に関係性は正機能とする。これは、過去においては是とされていた関係性が必ずしも現代においては通用しない、ということを認識する必要性が生じることにより、家族機能としての必要性があると考えられる。これは、最後のマクロ的機能とも関連するが、現代の制度体においては

「児童虐待防止等に関する法律」(児童虐待防止法),「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律」(DV防止法)といった,家族内関係について,外部からの積極的介入を促進するような法体系が整備されている。ゆえに,これを仮に制度把握機能とする。前記したように,家族と家族外社会は何らかの形で相互にフィードバックしている,という前提に立てば,家族内社会を,ミクロ,メゾ,エクソ,マクロ,クロノに分離し,個々の家族外システムと家族システムが相互にフィードバックし,家族構造を恒常的に維持するための機能を遂行することが必要,と考える。

3, 終わりに

システムと機能は一組で論じる必要があると考える。システムが変数の束であるという前提に立つなら,諸変数が持つ機能を多面的に考察する必要がある。本稿では家族システムとその外社会との関連から,相互にフィードバックする関係を前提にして家族構造存続という最低条件化における家族機能について考察した。もとより,社会学における機能論は多面且つ多彩に展開されてきた。今後所々の機能論を参考に,家族システム論を考察していきたい。

引用・参考文献

- ・森岡清美 監修 石原邦雄 佐竹洋人 堤マサエ 望月嵩 共編「家族社会学の展開」培風館 1993 年
- ・小室直樹「日本いまだ近代国家にあらず」ビジネス社 2010 年
- ・橋爪大三郎 副島隆彦「小室直樹の学問と思想」ビジネス社 2022 年
- ・小室直樹「危機の構造 日本社会崩壊のモデル」ダイヤモンド社 1982 年
- ・木戸功「概念としての家族 家族社会学のニッチと構造主義」新泉社 2010 年
- ・小室直樹「論理の方法 社会科学のためのモデル」東洋経済新報社 2003 年
- ・清水新二編「家族問題—危機と存続—」ミネルヴァ

書房 2000 年

- ・野々山久也 袖井孝子 篠崎正美編「いま家族に何が起きているのか—家族社会学のパラダイム転換をめぐる—」ミネルヴァ書房 1996 年
- ・落合恵美子「21 世紀家族へ」有斐閣 2007 年
- ・目黒依子「個人化する家族」勁草書房 1987 年
- ・森岡清美「家族周期論」培風館 1973 年
- ・野々山久也 清水浩明編「家族社会学の分析視角」ミネルヴァ書房 2001 年
- ・牟田和恵「戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性—」新曜社 1996 年
- ・落合恵美子『近代家族の曲がり角』角川書店 2000 年
- ・山田昌弘「近代家族の行方」新曜社 1994 年
- ・上野千鶴子「近代家族の成立と終焉」岩波書店 1994 年
- ・岡村重夫 黒川昭登「家族福祉論」ミネルヴァ書房 1971 年
- ・野々山久也編「家族福祉の視点—多様化するライフスタイルを生きる—」ミネルヴァ書房 1992 年
- ・森岡清美「家族変動論」ミネルヴァ書房 1993 年
- ・山田昌弘「迷走する家族 戦後家族モデルの形成と解体」有斐閣 2005 年
- ・山田昌弘「少子化社会日本 もう一つの格差の行方」岩波書店 2007 年
- ・山野則子「子ども虐待を防ぐ市町村ネットワークとソーシャルワーク グラウンテッド・セオリー・アプローチによるマネジメント実践理論の構築」明石書房 2009 年
- ・松田茂樹「何が育児を支えるのか—中庸なネットワークの強さ—」勁草書房 2008 年
- ・大谷信介「現代都市住民のパーソナルネットワーク—北米都市理論の日本的解釈—」ミネルヴァ書房 1995 年
- ・前田正子「子育てしやすい社会—保育・家庭・職場をめぐる育児支援」ミネルヴァ書房 2000 年
- ・宮台真司 熊坂賢次 公文俊平 井庭崇「社会システム論 不透明な社会を捉える知の技法」慶應義塾大学出版会 2011 年
- ・T・パーソンズ「社会的行為の概念」全5巻 野上毅 厚東洋輔ほか編 木鐸社 1971-89 年
- ・T・パーソンズ「社会体系論」佐藤勉訳 青木書店 1974 年
- ・T・パーソンズ R・ベールズ「核家族と子どもの社会化」橋爪貞雄ほか訳 黎明書房 1981 年

- ・ N・ルーマン「社会システム論」上下 佐藤勉監訳 恒星社厚生閣 1992-95 年
- ・ N・ルーマン「目的概念とシステム合理性」馬場靖雄 上村隆弘訳 勁草書房 1990 年
- ・ N・ルーマン「法と社会システム」土方昭監訳 新泉社 1983 年
- ・ N・ルーマン「社会システムのメタ理論」土方昭監訳 新泉社 1984 年
- ・ N・ルーマン「社会システムと時間軸」土方昭監訳 新泉社 1985 年
- ・ 上野千鶴子「おじとりさまの老後」法研 2007 年
- ・ 上野千鶴子「男おひとりさま道」法研 2009 年
- ・ マーサ・A・ファインマン「家族, 積みすぎた方舟 ポスト平等主義のフェミニズム法理論」上野千鶴子監訳・解説 速水葉子・穂田信子訳 学陽書房 2003 年
- ・ 柴野昌山編「しつけの社会学 社会化と社会統制」世界思想社 1989 年
- ・ 上野佳代子「児童虐待の社会学」世界思想社 1989 年

One Argument Considered with Family System Theory for Social Work III

SUGIMOTO Daisuke

Abstract

In this paper, I will discuss family functions, which are part of the family systems theory that I have examined thus far, by introducing various theories developed in family sociology and family welfare theory, and then I will put these into the context of family systems and family structure, which are the family systems and family structures that I have developed in the family systems theory that I have examined thus far.